

藤田定市

藤田定市さんについて思い出されるのは、まず、その太くて長い眉毛であります。それは不屈の意志力と、強い正義感を象徴するものであります。その眉毛の下には、人なつこい涼しい眼が輝いておりました。それは寛容と清純を象徴しているようでした。

藤田さんは、どちらかといえば寡黙な方でした。といって孤独を楽しむというのではなく、人を愛し、人の仲間の一人として安住しておられました。フジタ工業の司令部が東京に移ってから、自らは広島に住み、広島の人と自然を仲間として、終生、広島を離れようとはされませんでした。双葉会の有力メンバーとして何かにつけ広島のことを心配され、そのために惜しみなく私財も投じられました。

藤田さんが逝去されて、早や三年の星霜が流れましたが、ありし日の面影が益々鮮明に思い出される今日この頃であります。晩年は東京に出られることもそう多くはなかった藤田さんでした。しかし律義な藤田さんはご上京のつど、秘書の宮本さんを連れて、はるばる多摩川べりの拙宅を

訪ねてくれました。そしてその度毎に、家内にお心のこもったお小遣いを恵投してくれるのでした。その金額は決して巨額ではありませんでしたが、家内がとてもうれしく感謝していたことを思い出します。

藤田さんと故池田首相とは、晝の好敵手でした。藤田さんが上京されると二人はよく木挽町の「栄家」で、夜の更けるのも忘れて何番も対局しておられました。それは一種の賭け晝で、池田さんに若干分があつたようです。池田さんは、藤田さんから捲き上げたお金を、状袋に入れて大切に保存しておられました。

「フジタ工業」の今日を築く礎をすえられたのは、他ならぬこの藤田さんの強い意志と厚い信用でありました。一晝氏と正明氏という二人の秀れたご子息を育てられ、それぞれ、その適するところに従つて兄は業界へ、弟は政界に送り出されて見事な成功を収められたのも、藤田さんの深謀遠慮の賜物であつたと思います。

「政令都市広島」と「フジタ工業」の躍進を見るにつけ、思い出されるのは、広島とフジタ工業のためにその生涯を捧げられた藤田さんのことであります。仕事には忠実で、人には親切な藤田さんでした。あのやさしい笑顔をたたえながら、藤田さんが、またひよっこり拙宅の玄関に現われるように思われてなりません。

(昭五〇・九・三 静かなる鳥鷲の譜 『藤田定市追悼録』所収)